

「今、私の晴雨計は！③⑨」

「ポーランド旅行の後も……」

平山征夫

私のポーランドの旅からの帰国を待っていたかのように不思議とポーランドのあの時代の悲劇を扱ったTV番組、映画が相次いでいる。

帰国してすぐの9月22日深夜、何気なくつけたNHK・BS番組「世界のドキュメンタリー」は「ナチスのファースト・レディ」というもの、ナチスのNO2ゲッペルス宣伝相の妻マクダの数奇な人生を描いたものだ。

ベルリンの建築家と家政婦をしていた母親との間に生まれた

マクダは、実父の支援を得て裕福に育ち、19歳でドイツ人実業家と結婚、長男をもうけたが28歳で離婚、多額の慰謝料を手にした。暇と金を持って余っていたマクダが友人に誘われて出席したナチスの会合で出会ったゲッペルスの演説に魅了され、ナチス党に入党、ヒトラー立会いの下でゲッペルスと結婚、9年間で6人の子供をもうけた。ナチス党、特に宣伝相のゲッペルスにとってマクダは格好の宣伝媒体だった。ドイツの富裕層もナチス党を支援している証しに、ヒトラーと一緒に映るマクダの子供たちはそのイメージアップに使われた。マクダは夫の酷い浮気に悩まされたが、それを慰め離婚を思い止めさせ

たのはヒトラーだった。結婚していないヒトラーの元で、マクダはナチスの理想の母親とされ、ファースト・レディとして扱われたのだ。しかしナチスのプロパガンダの看板となったマクダと子供達の運命は、ドイツの敗戦が濃くなるとともに暗いものになっていった。1945年4月22日、マクダの子供たちは、少しの着替えと一個のおもちゃを持って総統地下壕に入った。子供たちだけは安全な場所に避難させたらという申し出がヒトラーからもあったが、マクダはこれを拒否、子供たちは時折歌を歌ったりして重苦しくなる地下壕に少しだけ明るさを与えていた。ソ連軍がベルリンに侵攻してきた29日、マクダ

はヒトラーと愛人エーファ・ブラウンの結婚（二人はその翌日自殺）を見届け、5月1日に子供たちと毒薬を飲ませた後、夫と共に自殺を遂げた。翌2日、遺体はソヴィエト赤軍によって発見されたが、子供たちは寝巻を着せられ、女兒は赤いリボンを結んだ姿で、夫妻は焼け焦げた遺体であった。その姿は赤軍の宣伝用写真となって世界に配信された。僅か4歳から12歳で命を絶たれた6人の子供達のことを思った時、全く逆の立場で同様に若くして命を絶たれたアンネ・フランクのことが頭に浮かんだ。双方とも「時代の狂気の犠牲」なのだろうが、それでは片づけられない何か深い理不尽さに腹が立って仕方

なかった。

死の直前、マクダが最初の夫との間に生まれたハラルト（当時23歳、ドイツ空軍パイロット）宛てに書いた手紙を読んだ。そこには子供たちをこんな運命に陥れた母親としての悔いは見当たらなかった。代わりに「私たちは唯一受容できる終焉を迎えようとしています」「総統と国家社会主義が消えた後の世界など、もう生きる価値の無いものですから、子供たちをここに連れてきたのです」そして「私たちは今、唯一残されたゴールに向かっています。それは死んでも変わらない総統への忠誠です」などの言葉があった。本音だったのだろうか。

新潟市の市民映画館「シネウイ

ンド」に10月初旬「夜明けの祈り」という大戦後のソ連支配下のポーランドで起こった実話をもとにした映画が上映された。ポーランドが舞台であるうえ「ボヴァリ―夫人とパン屋」で印象に残ったアンヌ・フォンテーヌの監督作品というので見に行った。

1945年12月、ソ連軍により解放されてまだ間もないポーランド、赤十字の施設で負傷兵の医療活動のため派遣されていたフランス人医師マチルドのもとに、助けを求めてシスターが駆け込んで来た。任務外なので断つたが、凍てつく空の下でいつまでも祈りをささげる姿に心動かされ、修道院に赴いた。そこで彼女が目にしたのは信仰上あり得な

い臨月の苦痛に喘ぐ修道女たちの姿だった。ソ連兵に犯されたのだ。敗走したドイツ軍と入れ替わるようにこの地を占領したソ連兵は数日間修道院に滞在し、修道女たちに姦行を繰り返し、その結果7人が妊娠したのだ。次々に産気づく修道女たち、この事実が世間に知られれば「修道院は閉鎖される」として秘かな対応を頼まれるマチルド。任務の合間を縫って修道院に通っていたマチルド自身危うく検問ソ連兵に犯されそうになったうえ、敵兵狩りのソ連小隊が再び修道院を襲って（この時は修道院にチフスが流行している）と咄嗟の嘘をつき撃退）くるなどもはや猶予はなかった。そこでマチルドはユダヤ人の同僚

男性医師に秘かに応援を頼み、過酷な運命と信仰の間で悩むシスター、そして生まれてくる新たな生命を守る覚悟を固めた。そんな折、任務終了による赤十字撤退が告げられる。次々と生まれてくる赤ん坊をいるはずもない修道院でどうするかという難題が帰国直前のマチルド達に課せられた。そこでマチルドが持ち出した案は・・・これはここで明かさな

い方が良いだろう。素晴らしい案とだけ言っておこう。
何より美しい画面に感動させられた。そして戦時に起こる兵士による性暴力が修道女に対しても平然と行われたことにシヨックを受けた。ポーランドの悲劇はこうして人々の間に戦後も続い

ていったことを知った。

この映画と入れ替わりにポーランド映画界の巨匠アンジェイ・ワイダ監督（昨年10月90歳で逝去）の遺作「残像」が上映された。

ソ連全体主義の圧政の元で生きなければならなかった前衛画家、ブワディスワフ・ストウシェミンスキは戦争によって手足の一部を失ったが、それでも意欲的に創作と美術教育に取り組んでいたが、アーティステック・レジスタンスのシンボルとみなされ、次々と活動を制限され、画材の供給を止められたり、作品を打ち壊されたりする。それでも画家としての誇りを失わず活動し続けた姿をワイダは最後の作品とした。将校だった父親を「カティンの森の虐

殺」で失ったワイダは数年前この事件を扱った作品も制作している。「残像」は中国出張と重なり残念ながら見る事が出来なかった。

ワイダと言えば先日ので「世界ふしぎ発見」に彼の奥さんが出演していた。徹底的に破壊されたワルシャワの歴史地区を復元した中心人物であるワルシャワ工科大のヤン・ザファドヴィツ教授の娘として、父の復元の証言をしていた。破壊を予想したヤン教授は戦時下建築学科の学生たちに建物すべてを詳細に写生して貰ったのだ。それと18世紀のベルナルド・ベロットの都市風景画を元に、瓦礫のかけらなど利用できるものは利用して復元したの

だ。彼のこの信念を示す言葉が残っている。「意図と目的をもって破壊された街並みは、意図と目的をもって復興させなければならぬ」「失われたものの復興は未来への責任である」と・・・。

まだ続いている。現在上映中の「否定と肯定」はホロコーストを研究・教育している米国の女性歴史学者とホロコーストは無かったとする（否定論者が多いのには驚かされるが・・・）英国中年男性の法廷闘争を描いた話題作。近日上映予定の「永遠のジャンゴ」は、マカロニ・ウエスタンみたいな題名だが、ロマで伝説のジャズギタリストと言われたジャンゴ・ラインハルトの処に、ナチ占領下のパリで仲間がジプシー狩りに

あっている最中、ナチス幹部の前での演奏命令が来る。さあどうするとうもの。また「ユダヤ人を救った動物園」は、アウシュビッツからこっそり連れ出し三〇〇人のユダヤ人を動物園の地下室に匿って助けたワルシャワの動物園経営者夫婦の話だ。レジスタンスに参加した夫の運命は・・・。

激動の時代ほど感動のドラマが生まれるということなのだろうが、喜んで見てばかりいられない。中谷さんが言うように「そうした時代を二度と起こさせない責任は現在を生きる我々にあるのだから・・・」。

（平成29年12月19日）